

エディトリアル

沖縄地域医療支援センター センター長 崎原永作

痛みは本来、何らかの体の傷害を知らせる警告信号であり、われわれの身体を傷害や危害から守るための重要な機能であるとされている。ところが痛みはその警告効果を最大化するためか不快感を伴う。痛みが組織傷害の時点や傷害の治癒過程の安静を必要とする時期(警告時期)にとどまるならまだしも、その時期を超えてもなお持続する痛みは悪夢でしかない。診療所では身体のさまざまな部分の痛み苦しめられ、QOLを落としている患者に遭遇し、その対応に苦慮することも少なくない。遷延する痛みは患者本人にとって耐え難いものであるにもかかわらず、客観的評価をする手段がなく、原因がはっきりしない場合、他者の共感が得られにくいという傾向にある。そのことが、治療者との良好な関係を構築する妨げとなることも十分にあり得る。痛みとしっかりと向き合うために本特集を企画した。

10年間の地域医療の経験を持つ上本宗唯先生にはスポーツドクターの視点から地域医療の現場で最も多く、適切に対処しなければADLレベルを低下させてしまう整形外科的な痛みをどう捉え、どう対処したらよいかを論じていただいた。

中村 博先生には痛みに関する漢方療法のアプローチをお示しいただいた。痛みの主な原因として「冷え・筋の痙性・水毒・瘀血・消耗・炎症」を挙げ、それぞれによる痛みに対する漢方薬を原因の分類と特徴、生薬の配合についてご説明いただいた。

痛みに対する鍼灸治療は昔からよく知られていて、その極め付けは手術における鍼麻酔といえる。鍼灸治療について小川恵子先生にご執筆いただいた。

白石吉彦先生には近年急速に広まりつつあるエコー下Fascia Hydro-releaseをご紹介いただいた。筋膜性疼痛症候群の原因がfasciaの癒着にあるとみて、エコー下で生食などを注入し癒着をリリースする手技である。生食とシリンジとエコーだけの手軽なこの手技は低侵襲性と相まって、診療所にフィットするのではないかと期待している。

そして、痛みに対する理学療法として、まず森 聡先生に急性痛の遷延により痛みへの反応性が増強する現象(感作)を防ぐ一手段としての経皮的電気刺激療法を中心に解説していただき、浅野香理先生には関節内運動機能障害の概念とその治療的運動である関節ファシリテーションをご紹介いただいた。新川雄一先生には痛みを主訴に診療所を訪れる患者さんの初診時から痛みの評価に至るまでの心構え、接し方などをご紹介いただいた。